

子供の病氣につきて

ひむかし

「禍は口から出で病氣は口から入る」といふ通り大底の病氣は食物から起ります。子供は一切の機關が十分發達して居ませぬから、いろ／＼の病氣に侵され易いものであります。別して離乳期以後は食物に依つて起る病氣が多いのは事實であります。即ち下劑は小兒に最も起り易い病氣でしよう。而して此病氣の危険なことも申すまでもありません。哺乳期の間専ら母親の乳を食物として居る時は、まだ割合に此病氣の危険が少ないのですが、一旦、離乳期に達し、さて、いろ／＼の人工的食物を與へる時が、一番注意しなければなりません。

或人は「なわに小供なぞは餘り注意し過ぎると反

つて弱くなるから、打放つて置くに限る」といひますが、これ程劍呑な事はありません。勿論、寒からうと云つて、無闇に厚衣をさせて反つて皮膚を弱くさせたりなどする事がありますが、これは反つて衛生上の智識が足りないやり方で、注意するといふよりも寧ろ不注意といつて宜しいでせう。「食べ物なぞも、餘り氣をつけては行かない」といつた所で、一年位の子供に、甘薯だの、餡の菓子なぞを食べて御覽じろ、すぐ下劑を始めます。「そんなら下等社會の子供などはどうか、随分食べ物なぞも亂暴にしてやつて、それでわんなに達者でないか」といふかも知れぬが、これも間違で、小兒の死亡の比例は、下等社會が一番多いのであります。大抵はこの「亂暴な育て方」で死んで仕舞つて、やつと残つて達者で居るのは、即

陶汰せられて残つてゐるのだから、割合に強いのであります。

だから、子供の人工的食物に向つては出来るだけ注意しなければなりません。一般の衛生の原則は、食物を味よく且つ消化し易く調利して食するに在る、大人でも然り、まして消化機能の十分完全でない子供の食物に於ておやであります。

さて、幾ら注意しても、病氣は仕方がない、思はぬ注意の不足から起る事があります。此時は尙更ら食物の注意が肝要です。大抵子供の下痢は、初發の時は、自然療法、即ち食物だけを注意して行けば、強いて服薬しないでも直るといふ話です。大人の病氣でも一に看病といふ位、まして子供に在つては、發達の機能が盛でありますから、大抵までは自然療法で済むものらしいです。

さればといつて、醫者には是非診察はして貰はねばなりません。私の言ふのは、薬よりも、醫者に相談して食物を嚴重にせよといふ事でありませぬ。私は昨年九月から、子供を下痢症にかゝらせて、かれは五月計り直りませなんだ。一時は殆んど危いとも思はれましたが、幸に元の健康に復せしめ得たのは、醫師の懇切なる指導の下に、食物に向つて十分注意を拂つた結果だと信じます。

